

## 平成 30 年度 第 2 回 学校協議会 議事録

### 0. 授業見学

#### 1. 学校長挨拶

9/4 の 21 号台風に係る被害 ①グラウンドのクラブハウス前フェンス破損 ②プール更衣棟屋根剥離 ③ガラス破損（複数） ④金属製仮設倉庫破損 ⑤非難用器具（ベランダ設置）の金属製蓋が吹き飛ぶ ①②に復旧予算が付いたが、他の甚大な被害への対応が優先されるので未着工。

10/1 の 24 号台風では、地元の要請があり避難所が本校に開設された。今後も地域の連携が必要と感じている。

#### 2. 取組みの進捗状況

生徒指導、1 学年、2 学年、3 学年、教務、進路、生徒会、総務、保健の順に報告。

協議員：授業見学の感想、3 年生を筆頭に落ちついて授業を聞いていた。福祉コースは難しい内容を扱っていた。

実習ではベッドメイキングをしていて実践的な内容だった。卒業後に繋がる学びとなってほしい。

1 年生のスケジュール手帳コンテストが面白い。掲示による披露や賞の設定が生徒の意欲を高める。

#### 3. 生活実態調査

4 月は全学年、8 月は 1・2 年生でアンケート実施（ベネッセ活用）。

##### ・「ケータイ所有率」

ほぼ全員が所有。「持っていない生徒」は数%で保護者と共有している例もある。通信料金は、保護者が払っているが、時間経過とともに本人がアルバイト代で払う率が増えてくる。ケータイを「1 日 2 時間以上使っている」生徒は 8 割に上る。

##### ・「アルバイト」

3 年生では 8 割が「している」。ケータイ代のためにアルバイトをするのか、アルバイトで財源があるのでケータイを使用するのか？平日の就業時間は「3～4 時間」が多い。

##### ・「睡眠時間」

6 時間以下が多い。アルバイトとケータイ使用が睡眠時間を圧迫。一方「8 時間以上」は 2～7%。

##### ・「部活をしない理由」

最も多いのは「アルバイトで時間が無い」。アルバイト優先志向で放課後の教育活動を忌避する生徒もいる。しかし、アルバイトを通して自己肯定感を醸成するケースもある。

##### ・「家庭にインターネット環境はある？」

9 割「ある」。ネット出願等利用場面が増える中、ネット環境に恵まれない生徒に対し、支援が必要。

##### ・「昼食弁当」

7 割が持参。2 年前の約 65%から改善。「食べない」生徒の見守り、観察が必要。朝食「食べない 20%」が休み時間に学食の軽食（ポテトとから揚げ）を食べている。

##### ・「中学時代、本校にどの程度入学したかったですか」

2 年前の「入学したい」6 割から、今年度 1 年生 4 月では否定的解答が 6～7 割と割合が逆転。しかし、8 月には肯定的解答が 6 割に増えた。入学生徒の意識に変化があるものの、入学後の充実感に変化はないと考える。

##### ・「学校の雰囲気」

「授業に集中している」のは3割以下。6割の生徒が授業中の私語を指摘。

・「手帳」

4月は4割の生徒が「活用」していたが、8月には半減。「全く活用していない」が36%になっている。成果として「生活習慣のパターンが分かるようになった」50%、「生活習慣が身についた」40%。

教頭：アルバイトは就職面接の場面でアピールになるのか、また、本校ではどのように指導しているか。

進路：企業はバイト経験をマイナスには捉えられていない様子だが、学校行事や勉強のことをメインにアピールするよう指導している。

#### 4. 協議

協議員：不登校の対応が難しい。どのようなアプローチしているか。

1年生：保護者連絡が不通時、クラスメイト伝いで情報収集。何度も家庭訪問。不在ならポスティング。中には「居留守」らしき時も。安否確認のため、行政機関に入ってもらおう例もある。

2年生：朝のHR時点で欠席者には家庭連絡、このタイミングで連絡がとれない家庭ほど不登校傾向。家庭訪問しても、不在で手紙を置いて帰ることも多い。学校ケータイからショートメールを送ることもあるが、文字数が制限され使いにくい。不登校生徒対策は苦慮している。

3年生：電話、家庭訪問、粘り強く連絡するしかない。「進路の悩み」決断できないプレッシャーからの逃避、勉強がしんどい。「進路実現」や「卒業」を取っ掛かりにアプローチをすると上手くいくときもある。しかし、それでもダメなときは打つ手がないのが実情。

生徒指導：「親が学校へ行け、先生が学校に来い、親や先生に頼まれたから仕方なく」という意識。「高校自体に行きたくなかった」とは言え「働くのも嫌」、このままが楽。遅刻指導では「何で来なあかんの」。これらの生徒層への指導について悩む。

協議員：生い立ち等は、高校だけで何とかなる問題ではない。自己肯定感・成功体験のない生活が長年蓄積し「投げやりな感覚」を作ったのではないか。小学校では「肯定的に言葉をかけていくこと」「活躍できる機会をつくること」「子どもと子どもをくっつける、集団作り」。例えば児童会の活性化、クラスミーティングを通して自己開示をする仕掛けを作るなどしている。

協議員：小学生のスマホ所有率は高い。特に高学年では顕著。しかし、SNS絡みのトラブル・いじめは意外とない。ゲームやyoutubeで深夜まで起きている例もあり、親に来てもらって指導している。学校への持ち込みは禁止。学校によっては安否確認のために許可している例もある。多数がスマホを所持していることを前提として、5年生でSNSについて指導、6年生では警察に来てもらって「防犯教室」開催。

教頭：最近高校では「むしろスマホを禁止にしてほしい」と希望する生徒もいて、SNS上の人間関係に疲弊している。

#### 5. まとめ

校長：高校で「不登校」「ひきこもり」をすれば、40歳まで「引きこもる」と言われている。福祉職の目線では、たとえアルバイトであっても「社会と繋がっているかどうか」を重視している状況。ネットの世界では、名前を知らない相手を「友達だ」と思っているという。直接的な人間関係を築くことが苦手な生徒には家庭訪問が大切。どうしても連絡が取れない場合、安否確認のため行政と連携が必要。「社会の中で、学校は何ができるのか」を丁寧に考えていかなければならない。